アルカディアーのトリゴノス（trigonos）

――ロマニスト達――

三石善吉

一　ウェルギリウス生誕二千年―アルカディアーのトリゴノス（三生）

ウェルギリウスの場合、すでに見たように、「アルカディアー」なる田園の「安らぎ」に満ちた牧人たちの「歌の共同体」が血なまぐさい外界の悪しき政治と対比された。現実の「悪しき政治」が、「在るべき理想郷」と対置されていて、読者に現在の「悪なる政治」の存在を、改めて気付かせるという非政治的な「政治的批判」となっていた。それ故、この「アルカディアー」なる理想郷は、この詩人の「文学的・詩的抵抗」の拠り所となっていたのである。

このウェルギリウスの状況と全く同じ状況が、ちょうど二千年後（ウェルギリウス生誕二千年）を契機に、ナ

チス・ドイツで発生することになった。それは当然のことであるが、ドイツのウェルギリウス研究の「ロマニスト・古典文献学者」達や思想家の知的営為の中に最も典型的に現われた。エルンスト・ローベルト・クルティウス、フリートリヒ・クリンクナー、ブルーノ・スネル、テオドール・ヘッカーなどは、自己のウェルギリウス研究を通じて、あるいは直接・間接にエルイン・パノフスキーの「われ、また、アルカディアーに在りき」（一九三六）なる論文に導かれて、抵抗の根拠地である「遥かなる夢幻郷アルカディアー」を見いだすのである。こういった、ウェルギリウス研究者達の精神的・学問的態度、ナチスに忠誠を誓わずにウェルギリウス研究を通じての精神的抵抗の姿勢を「アルカディアーのトリゴノス（三生）」の原型としよう。もちろん、ウェルギリウスの場合が「アルカディアー」の第一の誕生であり、ルネサンスにおける「再生」を経て、ここドイツのナチス政権下における発生を第三番目のもの、つまり「三生」・「トリゴノス」とする。

さて、われわれはドイツにおける「ウェルギリウスのアルカディアーのトリゴノス」現象に注目したが、最近出版された小川正広氏の浩瀚な書物『ウェルギリウス研究　ローマ詩人の創造』（一九九四）にもそのことが指摘されていた。われわれとはやや視角が異なるが、同じ現象に注目したものである。小川氏は次のように述べている。

まず、詩人の生誕二千年が祝われたのは、一九三〇年頃であり、それは第一次世界大戦（一九一四～一九一九年）が終わって約十年目に当たるが、しかしそれから九年後には第二次世界大戦（一九三九～一九四五年）が勃発したので、平和が回復したとはいえ、なお緊張の解けない時期であったと思われる。この時期に人々の関心をウェルギリウスに向けるきっかけとなった最も重要な著作は、ドイツ人テオドル・ヘッカーの『西洋の父ウェルギリウス』（一九三一年）であった。ヘッカーのこの書物は、当時英・仏・伊・西の各国語に翻

訳されて広く読まれた。その中でヘッカーは、「この危機的な時代において、われわれはウェルギリウスという人物と作品の中に、ギリシャ・ローマ世界とキリスト教西洋が一体で連続していることを認識することができる」と述べ、この古典詩人の作品によって、ヨーロッパが古代より文明と精神において一つの流れを形成してきたことを学ぶべきであると説いた。つまり、ウェルギリウスはヘッカーによって、ヨーロッパ世界の「調和」と「統合」のシンボルとして評価されたのである。[1]

テオドール・ヘッカーについては、われわれも大いに注目するものであり、後に言及するつもりである。彼の作品も含めて、一九三〇年のウェルギリウスの生誕二千年目を意識し、記念してこの年に書かれた書物・論文の内で、われわれの目に留まったものは次のとうりである。ただし、われわれが目にして確認できたものは、①②③④⑤のみで、他の⑥⑦⑧⑨は論文名のみである。もちろんこの九点の書物・論文だけで、「トリゴノス」の到来を断定するつもりはないし、出来ないであろう。しかし、にもかかわらず、ここにウェルギリウス復活の一つの兆候を読み取っても好いのではないだろうか？[2]

① Fr. Klingner, Die Einheit des virgilischen Lebenswerkes, 1930/1/15.（講演）
② Theodor Haecker, Vergil: Vater des Abendlandes, Leipzig, 1930.（新書版）
③ E.R. Curtius, Zweitausend Yahre Vergil, Neue Schweizer Rundschau, 1930.
④ R. Borchardt, Vergil, 1930/11.（講演）
⑤ Ernst Wiechert, Die Flöte des Pan, 1930.
⑥ W. Wili, Vergil, München 1930.

⑦ M. Schmidt, Die Komposition von, Vergils Georgica, Paderborn, 1930.

⑧ R. Heinze, Die Augusteische Kultur, Leipzig, 1930.

⑨ U. von Wilamowitz, Vergilius. Zu seinen 2000. Geburtstage, Deutsche Rnudschau.

のみならず、これと平行して、ドイツの伝統ある農民文学・郷土文学の二流・三流どころがナチスのいわゆる「血と大地 Blut und Boden」、俗に言う「Blu-Bo（ブルー・ボー）文学」に取り込まれ、「牧歌」を前面に押し出しつつ、安っぽいゲルマン民族共同体主義を謳歌しはじめ、ここに「本物の」牧歌（！）と「偽の」牧歌（！）と二つの牧歌が歌われることになった。「本物の」牧歌を知るために、「偽の」牧歌・「ブルー・ボー」文学の描く田園の理想郷を、その雰囲気を知るために、やや長く引用して見よう。ハンス・ツェーバーラインの『良心の命令』（一九三八）からである。[3]

「あなたの故郷はすばらしいわ」と、彼女は夢見るように言って、彼の腕のなかにもたれてきたので、彼はこの土地の美しさを適当に見せて褒めるために、彼女をぐるぐると回すことができた。

「こんなにドイツ的なところはそうあるものではないよ。だれだって自分の故郷のことならそういうだろうが、僕だってやっぱりそうだ。戦争中、僕達は兵隊になって方々の国にいったが、世界中で、僕達の国に及ぶところはどこにもない」。

それから二人は長い間黙っていた。それほど眺めるのに夢中になっていたのである。一度だけ彼は、無言で低地の森の向こうを指した。森からは二羽の大きなノスリがきらきら翼を輝かせて飛び立って、それから体

を動かさずに空中をふわふわと漂っていた。太陽の煌めく中を、果てしない黄金の輪を描いて飛翔しながら、鳥は山の上高く青空へと消えていった。

そして二人は、血がひそかに歌を歌うのを聞いた。彼らはぴったりと寄り添い、その呼吸も心臓の鼓動も、ただ一つになった。それは、彼らのまわりを動き、彼ら自身から発する一つの存在であった。彼らはたぎり立って、ついては離れ、ますますぴったりと体を寄せあいながら、そのことを感じた。そして彼らには、彼女が彼のために歌を歌い、二人の愛を知ったという幸福感に襲われたあの日が、まだ過ぎ去らないもののように思われた。お互いに抱き合う苦しい憧憬と不安のために、あの日と今の間に何一つ挟まっていないような気がした。

そのとき彼らは、永遠の創造の息吹の前に、かすかに身震いした。その息吹は、彼らが神秘的な力を行使し、原初からあらゆる存在の終末に至までの血の無限の鎖のために、新たな生命を創造するように清めてくれるのだ…

「君の髪は絹のように細く、乱れてぎしぎしいっていて、撫でると鉄が磁石に吸い寄せられるように僕の指にくっつく。さあ、こっちを見てご覧。こんなに僕達は愛し合っているのだ」。

彼女はそれを見て笑った。

「でも私が母と同じようにブロンドだったら？」

「君の髪がブロンドだろうと鳶色だろうと、僕は最初に火花を感じたのだ」

「それじゃ、もし私がユダヤ人だったら？」

「そうだったら、僕に火花を飛ばすことは出来なかったろうよ。どうしても君を納得させるために言っておきたいが、僕はブロンドのユヤダヤ人女性を何人も知っているよ」。

「私だってブロンドのユダヤ人男性を知っているわ」。

「それどころか、僕の知っているブロンドのドイツ人女性はユダヤ人と結婚して、そのちびのでぶと、ブロンドのジークフリートを何人かこしらえた。その子供たちは一二歳になると、もう親爺よりも大きくなったが、もっと純粋なユダヤ人になってしまった。それで一番面白いのは、彼のブロンドの女房が本物のユダヤ人みたいになった事だった。以前われわれの家に居たときには、純潔な天使だったがね。こういうふうに、朱に交われば赤くなるんだ。ユダヤ人はこれで自分の血をまた新しくするわけだが、もしユダヤ人の女と結婚していたのだったら、せいぜい、もっとちびのでぶを何人か作ったくらいの事だったろう」。

「吐き気がするわね」と、彼女は身震いした。「どうしてまあそんなに自分と言うものを忘れられるんでしょう！」

ブルーボー文学の代表者にはエルヴィン・コルベンハイヤー、ヴィル・フェスパー、ヨゼーファ・ベーレンス＝トーテノール、そして、ハンス・グラーザーによれば、見切り品中の見切り品が、上に引いたハンス・ツェーバーライン（一八九五～一九六四）で、かれは突撃隊の隊長であり第三帝国では最も愛好された作家であって、最大の発行部数を有し、ナチス党員の本棚には必ず彼の書が収められていたという。(4)

二　トリゴノスの原型ーロマニスト達の精神的抵抗

さて、われわれは、われわれの主題である「アルカディアーのトリゴノス」の原型、つまり古典文献学者達の「精神的抵抗」、その知的営為の跡を追跡しなければならない。取り上げる人物は、ここでは、フリートリヒ・クリンクナーを中心として、同じ古典文献学者のブルーノ・スネル、ロマニストのエルンスト・ローベルト・クルティウス、美術史家のエルウィン・パノフスキーの三名に説き及ぶことになろう。クリンクナーを中心に置くのは、彼の一九二〇年代のウェルギリウス論と一九三〇年代および四〇年代の論文との間には明確な変化が見られるからである。この三つの時代、つまりワイマル期・一九三〇年・ナチス掌権後の三時代に対応した変化とは、「ウェルギリウスの理想的景観」・「アルカディアー」に対する認識の深化とそれに伴う「精神的抵抗」の深化が見られるからである。この古典文献学者クリンクナーが、クルティウスやヘッカーやパノフスキーの直接間接の影響を受けつつ、古典的世界に沈潜していると見せ掛けながらも、学問の領域からナチスに精神的抵抗を敢行していると考えられるからである。

もちろん、われわれも第三帝国内における「国内亡命」・「精神的抵抗」なる概念に否定的である論者が多数居ることを知らないわけではない。フランツ・ショーナウアー『第三帝国のドイツ文学』（原書初版一九六一）は、「文学の《精神的亡命》の神話を粉砕する」ために書かれたし、それから二〇年後に書かれた、ヤン・ベルク編『ドイツ文学の社会史』（原書、一九八一）所収の、若い研究者ペーター・ツィンマーマンの「第三帝国の文学」の章

もその否定的見解の典型であって、[5] ドイツにおいては一般に「国内亡命」・「精神的抵抗」に対して厳しい態度が多く、たとえばツィンマーマンはおよそ次のように論断する。

ツィンマーマンはナチス滅亡直後の、トーマス・マンとフランク・ティース等との「国内亡命論争」に言及しつつ、「第三帝国の中でヒューマニズムが少なくとも部分的に守られたのは、何よりもヴェルナー・ベルゲングリューン、ルードルフ・アレクサンダー・シュレーダー、ハンス・カロッサ、エルンスト・ヴィーヒェルト、ラインホルト・シュナイダー、シュテファン・アンドレスなどのような作家の功績であったとしても」、彼らが、

第三帝国の時代にナチ党に対し、一方では一般的に批判的態度を取りながら、他方で、彼らの書物が合法的に出版され得たという事実だけからしても、その批判が原則的な主義に基づいたものではなかったことが推測される。ナチの権力者たちからは、彼らは重要なアリバイ機能を果たしてくれていただけに、大目で見られていたにすぎない。というのも、相当な力量をもつ市民的＝保守主義的作家のグループがずっと出版を許されていたという事実は、国内でも国外でも、国家による検閲はそれほどひどいものではなさそうだ、という幻想を起こさせるのに役立ったからである。

ツィンマーマンは結論として、上に挙げた作家たちを「保守的作家」として一括し、彼ら保守的作家を「日和見主義から解放し」、かつ「模範的な伝統の継承者」とすることに断固反対し、彼らの「精神的抵抗」なるものを鋭く否定するのである。

われわれは、このツィンマーマンの見解に、真っ向から反対するものである。ツィンマーマンの見解は、トーマス・マンの見解と同じく、第三帝国内で「悪魔の饗宴」に参加したとの廉で「精神的抵抗」・「国内亡命」の

存在を真っ向から否定するものである。われわれの考える「アルカディアー」なる概念を真っ向から否定する見解である。この見解は第三帝国内に閉じこめられた・優れた作家達の命を懸けた抵抗を無視（！）するものである。苛烈な・想像を絶する全体的権威的政治体制内における「精神的抵抗」を軽視（！）するものである。「アルカディアー」なる概念は、このように従来否定的に扱われて来た優れた作家・芸術家・学者達の名誉回復の学説であるが、ツィンマーマンの学説は、心ならずもナチス体制に閉じこめられた・良心的な・多数の・無名の人々の「声無き抵抗」をも無視するものである。このツィンマーマン自身にしても、「シュナイダーとベルゲンリューンの個々の作品がとにかくも精神的抵抗のドキュメントと考え得るとするなら（同書、六七四頁）」とも条件付で書いているからには、「精神的抵抗」なる概念を全く否定しているわけではなさそうである。

つまり、われわれの文脈に引き付けて言えば、ツィンマーマンですら完全にこの概念（つまり「国内亡命」・「精神的抵抗」なる概念）を否定しきれなかったのである。とするなら、それ故にこそ、われわれは、以下でこの偉大なる精神的抵抗の真の跡をたどる事を目的としなければならない。それこそが、われわれのこの論文の主眼となる。その典型的事例として、われわれは、まず、ナチス期における「ロマニスト・古典文献学者」達の知的格闘・精神的抵抗を跡ずけてみる事から始めたい。「アルカディアー」の「トリゴノス（三生）」の原型の検出である。

まず、フリートリヒ・クリンクナーのウェルギリウスに関する論文を年代順に並べる。一九二〇年代のもの、一九三〇年のウェルギリウス生誕二千年期を意識したもの、一九四〇年代のものである。(6)

①一九二七：Virgils erste Ekloge.

②一九三〇：Die Einheit des virgilischen Lebenswerkes.（一九三〇年代には、この三〇年の一論文、三一年

の二論文、三六年の一論文の全四つのウェルギリウス論があるが、ここでは生誕二千目に当たる一九三〇年の論文のみ取り上げる)。

③一九四二：Virgil. Wiederentdeckung eines Dichters.

④一九四三：Virgil und die geschichtliche Welt.

この四つの論文で注目すべき点は、牧人達のこの理想郷をどのように呼び、どのように意味付けているかという事である。まず、一九二七年の「牧歌」の第一曲を論じた文章では、牧人の理想郷・「アルカディアー」について全く言及しない。ここでは極めて客観的に冷静に「牧歌」の世界が分析され、「牧歌」の世界も、たかだか、「美しい牧人の世界 die Schönheit der Hirtenwelt」などとそっけなく呼ばれているにすぎない。

一九三〇年一月の講演において初めて、牧歌的理想郷の概念が説かれるが、ところがまだ、「アルカディアー」なる言葉は出現せず、以下の文において見るように、いささか熟していない別の言葉・表現を用いている。「アルカディアー」なる概念はまだ発見されていないのである。さて、この一九三〇年の講演は『牧歌』・『農耕詩』・『アエネーイス』三作の「構成における精神的統一性」を論じたもので、『牧歌』について、彼は次のように言う。

ウェルギリウスは「全く明白な意図」をもって、「テオクリトスの詩を彼自身の心の中で鳴り響く内なる音楽を演奏するために利用した」。しかし、「テオクリトスの詩にはない重要な点がある」。それは第一歌と第九歌に見られる「歴史なき・時間なき牧歌的世界」と「内乱の混乱」との対比である(二七七頁)。クリンクナーの言葉を引けば、

彼(ウェルギリウス)はその「安らぎの世界 friedlichen Welt」から別の暴力の世界に呼び掛けて、独裁者

Machthaber に詩人の生活と芸術が消失したことを思い出させる。…かくてヘレニズム的なジャンルを痛くローマ的なるものに変え、かくすることによって、それ自体歴史なき「牧歌」的世界はローマの歴史的現実との結合を見いだしたのである。(二七八～七九頁)

この引用文から、二つの事を確認しておきたい。まず、引用文の前半において、クリンクナーは早くもこの一九三〇年の時点で、ウェルギリウスの口を借りて、台頭するナチスの暴力主義と「独裁者」に抗議をしていると見る。ここには彼の、学問を通じての「警告」とその抵抗の根拠地・「安らぎの世界」の存在を読み取ること。もう一つは、クリンクナーはこの論文のなかで、この理想郷を、上文に見られるように「安らぎの世界」とか「歴史なき牧歌的世界」とか、また別のところでは「牧人の居る・彼自身の内なる声で満たされた牧歌の世界」と説明し、そして、簡潔に・端的に、これを「夢想の空間 erträumten Raum」と呼んでいることである。つまり、クリンクナーはこの一九三〇年一月の時点では、まだ思想的範疇としての「アルカディアー」を「牧歌」のなかに発見していない。「夢想の空間」と言う表現は、その一歩手前であるが、彼がそれを「アルカディアー」と呼ぶようになるのは、ナチスの権力掌握後の事である。エルンスト・ローベルト・クルティウスも一九三〇年一〇月に書かれた「二千年のウェルギリウス」で、理想的牧歌的環境を「至福の閑暇 selige Musse」とか、「極楽の至福 die Seligkeit Elysium」と呼び、「牧歌」の世界をまだ「アルカディアー」とは規定していない。「アルカディアー」の発見は、われわれの文脈からすれば当然であるが、ナチスの「強制的画一化」の後になされる事になる。

三　エルウィン・パノフスキー―美術史の立場から

この「夢想の空間」、「極楽の至福」に名前が付けられるのは、「強制的画一化」の後、エルウィン・パノフスキーの論文の出現まで待たねばならない。それはナチス掌権からほぼ三年後、一九三六年のことである。パノフスキーの論文は、"Philosophy and History, Essays Presented to Ernst Cassirer", に、'Et in Arcadia ego – On the Conception of Transience in Poussin and Watteau', として発表された。パノフスキーは一九三三年四月七日の「職業官吏法」で、ハンブルク大学美術史教授の職を追われ、ニューヨーク大学、プリンストン大学の兼任講師となり、一九三五年にはプリンストン高等学術研究所に招聘されて研究に従事していた。(7)

この論文でパノフスキーは、ウェルギリウスが「アルカディアー」なる「幻想」の理想郷を作り上げたことを、次のように述べた。

かくて近代的精神がおのずと「アルカディアー」なる言葉と結びつけるあのパラダイスの概念を作りあげたのはウェルギリウスであった。…ウェルギリウスが新しい幻想の王国 a new visionary realm を創造した。(二二七頁)

そして、長い眠りの後に

ルネサンスにおいて、ウェルギリウスのアルカディアーは過去の中から、まるで魔術的な幻想のように立ち現われた。(二二九頁)

パノフスキーに至って、初めて、ウェルギリウスの「牧歌」の世界が「アルカディアー」と名付けられた。もちろん、「アルカディアー」は田園の理想郷として、ルネサンス以降ヨーロッパ人の心の故郷であったが、これを「牧歌」の世界と同一視したのはパノフスキーに始まり、しかもパノフスキーはこの理想郷を「幻想の王国アルカディアー the visionary kingdom of Arcadia」と呼び、その誕生と再生を説いたのである。

パノフスキーの美術史の方法は、「芸術的生産」つまり絵画として描かれることと、「象徴的表出作用」つまりある絵画の描かれ方・その抽象化との間にある「哲学性」に注目する所に特徴がある。すなわち「芸術作品を単にその芸術家の人格の表現としてだけでなく、それが創造された時代の支配的な雰囲気、すなわち世界観の表出としてみる」のである。彼は自分のこういった芸術観を「イコノロジー Iconology」と呼んだ。(8)

「イコノロジー」なる学問の創始者・パノフスキーが芸術作品を支配的な時代思潮の関数とみているという事は重要なことである。この一九三六年と言う時点で、すでに彼自身のみならず多数の非アーリア系のドイツ人がナチスによって亡命を余儀なくされているという事実、故郷を喪失したものであるとの事実が、パノフスキーをしてこの論文を執筆させる動機の一つとなっているのではないかと推察されるからである。「イコノロジー」の方法そのままに、彼はナチスの世界観に対置するに自分の、いや、もっと広範な人道的世界観をもってして、ウェルギリウスの「牧歌」に自己の、いや全ての反ナチスの知識人達の、依るべき心の故郷を見いだし、それを「アルカディアー」と呼んだのではあるまいか？

「われまたアルカディアーにありき」という題名は、したがって、極めて意味深長であって、「自分の離れてきたドイツの、今はなき、よき時代、そのアルカディアーにわれもまたありき」と表明したのではなかったか？

この論文で、ウェルギリウスのアルカディアーの「誕生」を説き、ルネサンスにおけるアルカディアーの「再生」を説き、そしてこの一九三〇年代ナチスの暴虐な政治の下に呻吟するドイツ人のためにアルカディアーの「三生」を説き、願望の・抵抗の根拠地を与えたのではあるまいか？　彼・パノフスキーがそのことを意識しようとしまいと、実は、古典文献学者達は直接間接にパノフスキーに導かれて、アルカディアーの「三生・トリゴノス」に向かったのである。

パノフスキーの「アルカディアー」はクリンクナーに影響を与えたのであろうか？　クリンクナーは一九四二年の論文「ウェルギリウス―ある詩人の再発見」のなかで、田園の理想郷を、初めて「夢のような願望の国アルカディアー」と呼んで、『牧歌』の世界と「アルカディアー」の世界を同一視しているからである。しかし、クリンクナー自身はそのことを明言していない。

四　フリートリヒ・クリンクナーの場合

Friedrich Klingner は一八九四年七月、ドレスデンで生まれ、チュービンゲン大学、ベルリン大学、マーブルク大学で古典文献学を学び、ハンブルク大学、ライプチッヒ大学（一九三〇～四七）で教え、一九四七年から没年の一九六八年一月まで二一年間ミュンヘン大学で教鞭を執っていた。二〇世紀の古典文献学の最も著名な学者で、とくにローマ文学研究では、ドイツのラテン研究のみちしるべ的人物であった（『ブロックハウス』）。ナチス期に出版された研究書に『ローマ人の精神世界 Römische Geisteswelt』（一九四三）がある。さて、クリンクナーの一

九四二年の論文を見ていこう。

ヘルダー、フンボルト、ヴォルフ、ハイネらはウェルギリウスに対して否定的であった。一九三〇年の二千年祭での注目すべき論考はクルティウスのものとシュレーダーのものであったと指摘し、ウェルギリウスを「外的原因からの逃避的言行」と見ることの重要性を説いた。そしてひるがえって、ウェルギリウス研究の流れを概観するが、新しい研究方法はRichard Heinze（一九一五）とG. Jachmann（一九二二）によって、単なるテオクリトスの「模倣者」としてではなく、その全体像を把握しなければならないとの新しい方向が示され、以後その方向での努力がなされてきたという。今日での（つまりナチス期での）「新しい努力」は「共同研究や古代研究者の小さなサークルの中でのみ知られた、分散した諸論考の中で」発表されていると書いているが、このウェルギリウス研究史の中では、パノフスキーに言及していない。

クリンクナーのこの論文から、この一九四二年という時点においても、新しい問題意識をもった古典研究者達の、ドイツに散在する小さなサークルの中で、ゲルマン研究ではなくて、古典ラテン文学の研究が営々と積み重ねられ、優れた論考が各地で発表されてきている事が伺われ、感動的である。さて、この論考のなかで、クリンクナーは、自分自身が一九三〇年に規定した「夢想の空間」に代わって、次のような別の言い方をしている。

願望の国アルカディアーWunschland Arkadien、そこでは牧人の歌の中に、愛と悲しみが、詩人を取り囲む混乱の・荒廃の生活の中におけるよりも、もっと美しく鳴り響く。（二四七頁）

こうして、クリンクナーによって「願望の国アルカディアー」とはウェルギリウスの「牧歌の世界」に他ならないことが指摘された（彼は、すでに述べたように、パノフスキーの論文には言及しない）。彼は次の年、一九四三

年に発表された「ウェルギリウスと歴史世界」なる論考の中で、この「願望の国アルカディアー」について、さらに詳述する。

一九四三年のこの論文は、まず、ウェルギリウスの生きた時代（前七〇～前一九）の、激動の共和政最末期の歴史状況から説き起こす。「ウェルギリウスの生きた時代は、終末と絶望の沈鬱に取り囲まれた極限状況の時代」（二九六頁）、ローマ没落の予感の漂う時代、何に対して、何のために、何が残るのかわからない時代として描かれる。こういった時代に、ウェルギリウスの詩作活動が開始され、その最初の作品が「牧歌 Bucolica」である。次にやや長く彼の文章を引こう。

最初の作品は「牧歌 Bucolica」である。いずれも二、三頁の、一〇個の小さな詩である。それは夢のような願望の国アルカディアー（traum haften Wunschland Arkadien）、ウェルギリウスが後代の全ての人々のために発見した、アルカディアーにおける牧人の歌である。そこには荒野や森や牧場があり、おちこちに農家もある。ウェルギリウスの故郷の田舎に在るものもあり、しかしまた何か楽園の如きもの、全く平凡な現実の世捨て人の世界でもある。しかし、とりわけそこは、人が歌い、歌が最高のものである。芸術的生活の場である。牧人は一人の時も、家畜の番をして互いに顔を合わせた時も、歌を歌う。彼らは互いにからかいあい、ほめあい、はりあいつつ二重唱をして、簡素な生活品〔例えば杯〕のために、雌山羊・雌羊のために、仕事のために、成功と不意の不幸のために、瞬間の感性と予感のために、彼らは歌う。（二九三頁）

クリンクナーは、このように明るく・楽しげな「牧歌」のアルカディアー的世界を描きだす一方、彼はさらに他方で、このアルカディアーに現実の歴史状況を次の引用文が示すように対置させる。つまり、クリンクナーは、

一九四三年のドイツの現状と前一世紀のウェルギリウスとを完全に重ね合わせ、ここで、学問的に・精神的にナチス批判を敢行していると考えられる。ウェルギリウスを語りながら、見事に己れを語っている。

以下の文中の「詩人」をクリンクナー自身と読み替え、「牧歌」をクリンクナーの学術的研究論文と読み替え、「アルカディアー」を悪しき現実に対比されたクリンクナーの考える理想社会と読み替えて、次の文を見てほしい。

「牧歌」には隔絶された地があり、詩人のその地は恐ろしげに出来事が生起している（furchtbar die Geschichte geschiet）大きな世界に対置されている。歴史的世界のこの詩人は、この世界とともに行為するのではなくて、まず悲しみに満ちた経験の中に次第にそれ〔アルカディアーのこと〕を発見していくのだという事を理解することは大切である。アルカディアーは罪と悲しみに満ちたこの世の出来事の呪いに対する避難所（Zuflucht）であり、歴史の領域に対置されている。しかし、詩人もまた、やはり、その大きな実在世界の真っ只中に生きている。そして、全ての人々と同じく、詩人が体験するものは、「牧歌」の中に反映し、同じように詩人も歴史の苦しみを受けるのである。詩人のアルカディアー圏（arkadischen Sphäre）の周辺では、威嚇的に・圧倒的に、戦いが・破壊が起こっている。家郷喪失の嘆き、詩人と共に無防備にも滅亡にさらされた美しきものへの嘆きが、その詩の中に鳴り響き始めるのである。（三〇〇～〇一頁）

「詩人」（クリンクナー自身と読み替える）を取り巻く、〝恐ろしい・罪と悲しみに満ちた・威嚇的に圧倒的に戦いが破壊が起こっている〟世界とは、いまナチズの支配するこのドイツの現状でなくて何であろう？「詩人」（クリンクナー自身と読み替える）を詩作（研究と読み替える）に駆り立てるものこそ、〝無防備にも滅亡にさらされた美しきものへの嘆き〟に他ならない。この嘆きをバネにして、この悲しみを昇華させて、「詩人」（クリンクナー

自身と読み替える）は現実に対比された理想の「アルカディアー」を構想し、現実の悪しき政治に対置してこれを告発しつつ、人々に失われたものの美しさを改めて認識させるのである。クリンクナーはまた、「牧歌の基本形態」である「願望の国アルカディアー」はウェルギリウスの次の作品「農耕詩」の中では「農民のイタリア」と結び付けられ融合しているとも指摘している。

この引用文中で特に注目すべきは「歴史的世界のこの詩人は…悲しみに満ちた経験の中に次第にそれ〔アルカディアー〕を発見していくのだという事を理解することは大切である」という指摘である。これはクリンクナーが、パノフスキーとは全く別に「アルカディアー」を「次第に」発見したことを示している可能性を示すものであるかもしれない。彼の場合、「アルカディアー」がナチスの暴虐政治からの「避難所」ではなくて、このような学問的告発を行なう「拠り所」になっている、そのことを彼自身「次第に」発見していったのだと言っているのではあるまいか？

繰り返して言えば、要するに、クリンクナーは「恐ろしげに出来事が生起している」・「罪と悲しみに満ちたこの世の呪い」・「威嚇的に・圧倒的に、戦いが・破壊が起こっている」ウェルギウスの時代を語りつつ、現在のナチス支配の現実と重ねあわせ、これを「罪と悲しみに満ちたこの世」と断定し、間接的に、学問の装いの下にナチスを告発しているのである。じつに見事な「精神的抵抗」ではないか！　次に述べるスネルの研究が広く世界に紹介されているのに比べ、クリンクナーのこの研究が余り日本で知られていないのは、惜しまれることである。

ブルーノ・スネルの有名な論文「アルカディアー　ある精神的風土の発見」は、一九四四年の「古代と西洋

Antike und Abendland」第一号に載った。その中でスネルはパノフスキーの「われ、また、アルカディアーにありき」を注で参照させている。つまりスネルはパノフスキーの直接の影響の下にこの論文を書いていることに注意しておこう。

五　ブルーノ・スネルの場合

Bruno Snellは一八九六年六月に北ドイツのヒルデハイムに生まれ、エディンバラ、オックスフォードで法学、経済学を学ぶ。第一次世界大戦後古典文献学に転じ、ライデン大学、ベルリン大学、ミュンヘン大学、ゲッチンゲン大学で学び、一九二二年ゲッチンゲンで学位をとり、一九二五年ハンブルク大学の私講師、一九三一年同大学の古典文献学の正教授となり、一九六〇年に退官するまで、一貫してここで教えた。

スネル教授に師事した新井靖一早大教授（一九二九～）は、スネルの主著の邦訳『精神の発見』（原書初版一九四六）の「後書き」で、スネルが「いかなる精神科学も政治に無関係であると考えることは出来ない」との信念のもとに、ナチス壊滅の戦後、二度にわたってハンブルク大学の学長を務め、大学改革に傾注したことを記している。スネルのナチス期における行動については、全く不明である。一九七八年に"Der Weg zum Denken und zur Wahrheit"（Göttingen）なる書物が出ている。書名から推察すると、これにナチス期の回想などが載っているかもしれないと思われようが、残念ながらこの書物は、古代ギリシャ人の認識の問題を論じている純学術的著書であって、自伝ではない。この書物の中に「一九二〇年代のドイツ古典文献学」なる論考があるが、ナチス政

権獲得前のことが論じられているだけである。また同じ新井教授の訳した『言語　詩学　哲学』（大修館、一九七八）も、ナチス期の事には全く言及しない純学術書である。スネルのナチス期の思想と行動については、私にとっては、今のところまだ直接的には追跡できないでいる。

スネルのこの論文「アルカディアー　ある精神的風土の発見」はウェルギリウスを論じて大変に有名であって、以下に新井氏の訳に従って、われわれの文脈に引き付けつつ、紹介しよう。さて、スネルのアルカディアー論は、

アルカディアーは西暦紀元前四二年ないしは四一年に発見された。むろんこれは百科事典で次のように記述されているあのアルカディアーではない。《ペロポネーソス半島の中央に位置する高原地帯。非常に高い山も含む山脈によって四方を囲まれ、半島の他の地域から隔てられている。内部は夥しい稜線によって多くの小地域に分離されている》。…だがこれは、この名前を聞くとき、今日われわれの殆どすべてが思い浮かべるアルカディアーではない。われわれの思い浮かべるアルカディアーとは、羊飼いたちの国、恋と詩の国である。この国の発見者はウェルギリウスである。

なる書き出しで始まる有名な論文であって、クリンクナーのものがほとんど外国語（日本語にも）に訳されていないのと対照的に、英語、イタリア語、スペイン語、日本語などに訳されて有名になった。さて、スネルは、パノフスキーの論文をふまえつつ、次のように論ずる。

シシリア（テオクリストの故郷であり、かつ「牧歌」の舞台）はローマの属領となり、珍しくない土地となってしまった。そこで、ウェルギリウスは彼の羊飼い達のために、一段と厭わしくなった現実から遠く離れた土地を必要とした。かくして、ウェルギリウスは遥か彼方の黄金色の靄のうちにかすむ国を必要とし、「アルカディアー

を発見」することになった。このアルカディアーは黄金色に美化された日常の国で、憧れの対象でもあるが、そこに「同時代の出来事」・「政治」が介入してくる。そもそもウェルギリウスの時代は内乱の時代であり、平和への渇望が熾烈な時代であった。スネルの文を引こう。

ウェルギリウスが時代の出来事について述べる場合、彼の判断は、アルカディアー全体を満たしている感情、つまり、平和と故郷への憧憬の感情によって支配されている。彼の政治上の熱望が前（第一歌のこと）よりも一層はっきりと表現されている『選歌（牧歌）』第四では、彼の憧憬は直ちに黄金時代に飛び移って、たちまちにして終末論的希望と結びついているのである。詩人のこれらの夢は、時代の様々の期待に対応した解釈を歴史に与えている。内乱の収拾しがたい紛じょうの後では、平和への渇望はその時代の最も優れた人々の間でとりわけ熾烈であった。その限りではウェルギリウスのこれらの詩句の中には真に政治的なもの、現実の問題が隠れ潜んでいる。（五〇九頁）

ここでは、アルカディアーの理想的景観の背後には「真に政治的なもの、現実の問題が隠れ潜んでいる」と指摘している事に注目して置こう。スネルは「牧歌」に潜むウェルギリウスの政治批判の精神を見抜いている。「平和と故郷への憧憬の感情」が、つまり「アルカディアー」が、現実批判と分かちがたく結びついている事を洞察している。とくに留意すべきは「憧憬の感情」という言葉である。「感情」とは「人の心に触れるもの、やさしい感情を誘い出すもの」、「心情の世界」（五〇八頁）のことであって、これは「内乱の現実」世界に対応する。かくて、スネルは、具体的に、この危機の時代・内乱の時代に詩人・知識人はどのように生きるのかを、二つのケースを挙げて論じる。

一人はプラトンである。「既成国家は余りにも不正が行なわれすぎてい」る。プラトンは「諦めてこう認識せざるを得なかった。すなわち、正義を心がけている人々にとっては、既成国家の中に身を置く場所はないのだ」と。こうしてプラトンは「アカデーメイア」つまり「至福の島」に移り住んで現実の政治と妥協することを拒んだ。（五一〇頁）

もう一人が、実は、ウェルギリウスである。スネルは次にように述べている。

ところがウェルギリウスは、この苛酷で悪意ある現実から眼をそむけ、そういうものは背後に打ち捨てておく。彼がアルカディアーへ出発する際、この混乱した時代を嘆く感情には、この時代を多少なりとも変えることが出来るのだという希望もなければ、またそうしたいという願望すらもない。よりよい時代を求めているのは、彼の思考もしくは意欲ではなく、彼の感情なのである。こうして彼は憧れの感情からこの暗澹たる世界を逃れる。彼の待望するのは、正義の支配する国家ではなく、すべてのものが親しく睦み合って共に生活する牧歌的な平和であり、獅子と小羊が仲よく暮らし、一切の対立が解けて一つに和合し、一切が大いなる愛のうちに相会する黄金時代である。（五一一頁）

スネルはここでウェルギリウスを「黄金時代」に逃げ込んだ「逃避」者と見ているのだろうか？「悪意ある現実から眼をそむけ」るとか、変革の願望すら無いとかはともかくとして、「この暗澹たる世界を逃れる」と言う指摘は「逃避」そのものであると、一見そう見える。

結論から言おう。スネルのこの一文は、ウェルギリウスの「逃避」を語っているのではなく、現実から「超越」した「黄金時代としてのアルカディアー」が歌われているという事を指摘しているのである。スネルはまた「無

愛想な現実の事実の彼方にある領域」（五一三頁）とも言っているが、その世界に心を遊ばせることを、われわれは、ここで、「現実超越性」と呼ぼう。そして、まさにこの「現実超越性」こそが、一見、ウェルギリウスの「アルカディアー」に現実からの「逃避」性を想起させるのであるが、しかし、スネル自身も鋭く見抜いているように、ウェルギリウスの構想するこの世界は、「現実」の政治状況と鋭く対比され、そこから「超越」した「心情の世界」・精神の世界のことなのであって、こういった世界を構想すること、詩として表現すること自体が「詩人としての自覚」（五一三頁）に基づく現実批判となっているのである。「詩人としての自覚」とは自己の描き上げる詩的世界像の持つ現実的な意味と機能とを熟知する者の謂であるからには、そもそも「逃避の心情」をもつ「自覚的詩人」なぞ存在するはずはないであろう。したがって、われわれの見方によれば、スネルの描くプラトンは「理性の力」で現実の政治を拒否したが、ウェルギリウスは「心情の世界」つまり「アルカディアー」を構想することによって、現実の政治を拒否したと見るべきなのである。クリンクナーの場合と同じように、ウェルギウスに託しての、見事な現実批判・ナチス批判・「精神的抵抗」である！

さて、以上クリンクナー、クルティウス、スネル（そしてパノフスキー）らの古典文献学者の場合に見てきたように、ナチス期において、古典文献学者達がウェルギウスの「牧歌」に依拠して間接的に現在の政治を批判する精神的抵抗の在り方を、われわれは、思想的範疇としの「アルカディアーのトリゴノス（三生）の原型」と名付ける。もちろん、ここで言う「トリゴノス」とは、ウェルギリウスによる「アルカディアーの誕生」、ルネサンス期におけるその「再生」、そしてこのナチス期における「三たび目の盛況」つまり「トリゴノス」であり、「原型」というのは、次に述べるように、古典文献学者達のそのような「精神的抵抗」・「国内亡命」を原型として、さ

らにこの概念を一般の学者、芸術家、哲学者、作家、音楽家、歴史家、法哲学者等々の領域にも拡げたいからである。第三帝国における、全ての文化・社会・科学・芸術等の領域における、精神的抵抗一般を表す概念としてこの「アルカディアー」を用いたいからである。

いや、それだけではない。一般の人々の中でも、心のなかではナチスの体制を拒否しつつも、さまざまな事情があって、なんらの「証拠」（文学であろうと、詩であろうと、学術的研究であろうと、日記であろうと、何でも構わない）を残すことが出来ず、批判の心を表に出すことが出来ずに、「精神的抵抗心」を持ってこのナチス期を生きた人々も多数いたはずである。この多数の「無名の英雄達」の名誉のために、どうしても、「アルカディアー」なるこの概念を設定し、彼らの「名誉」を回復してやる必要があると考える。

もちろん「わたしは国内亡命者であった」という言葉が、戦後の殆ど全てのドイツ人のナチス期における「潔白」を言いたてる場合の「合い言葉」であったともいう。戦後のドイツで、この言葉は全く人気がなくなってしまったというのにも、じつは、一端の真実が含まれていよう。主観的には多くの人々が精神的抵抗者であったのだ。にもかかわらず、狂暴なナチスの嵐に巻き込まれ心ならずもナチスに従ったのである。ハナー・アーレントが後になって、断言しているように、「妻子のことを気遣うあまりに強制的同一化をすることが悪いことだとは誰も思わなかったのです。ずっと深刻なのは、そうした人々が本当にそれを信奉してしまったことです。短期間、それもたいていの人々は非常に短い間です。でも、短期間にしろ、その人々がヒトラーに対して何らかの幻想を抱いたのです」（『思想』一九九五年八月号、《インタヴュー》「何が残ったか？　母語が残った」）。

精神的抵抗と順応とは紙一重であり、かつ、精神的抵抗と順応は日によって、時によっても、揺れ動くこともあっ

たであろう。しかし、重要な点は、直ちに、「非常に短い間に」正気を取り戻し、「抵抗の、抗議の、否定の」精神を取り戻すことである。こういった「アンビバレントな心情」を持った者をも、われわれは「国内亡命者」の中に含めて理解することは重要なことと思われる。一貫せる精神的抵抗から「非常に短期間の」順応に至るまで、この間には幾つもの中間項が考えられようが、(アーレントとは違って)この一連の精神の動き、精神の動揺の幅を認めることも重要ではあるまいか？　もちろん、一貫せる精神的抵抗者が理想的ではあろうが、心のなかに微かにでも弱気になった場合もあったであろう事実を認めるべきであろう。そのような場合をも含めて、われわれは「精神的抵抗」・「国内亡命」・「アルカディアー」の概念を幅広く考えたいのである。　次の章では、そのような一般の人々のケースをも念頭に置きつつ、まずは明確な「証拠」を残した、精神的抵抗者達の言論活動について考察を加えていくことにしよう。

注

(1)　小川正広『ウェルギリウス研究　ローマ詩人の創造』京都大学出版会、一九九四、頁一四。なお、筑波大学所蔵の Theodor Haecker, "Vergil Vater des Abendlandes" は一九三一年、Leipzig の Verlag Jakob Hegner 版を一九四八年に再版したものであるが、フリートリヒ・クリンクナーは、"Römische Geisteswelt"（一九四三）の二七二頁の注2でこれを一九三〇年としている。ここでは一九三〇年初版出版説に従う。

(2)　Fr. Klingner のこの論文（講演）は、"Römische Geisteswelt", München, 1943, SS.274～292. 所収。クルティウスの論文は彼の『ヨーロッパ文学評論集』川村二郎他訳、みすず書房、一九九一の第一章参照。ボルヒァルト「ウェルギウス」（松浦憲作訳）は『世界批評大系3　詩論の展開』筑摩書房、一九七五、頁四〇～四八。ヴィーヒェルトは、"Ernst

Wiechert Sämtliche Werke in Zehn Bänden", Band 7, Verlag Kurt Desch, Wien-München-Basel, 1957, SS.213～420.（7編の短篇からなる）。⑥から⑨までの論文名は、クリンクナー、クルティウスの書から得た。なお、小川正広氏の上掲書二三頁の注三五によると、ウェルギウス生誕二千年を記念して世界各国で出版された書物論文の文献目録、F. Peeters, "A Bibliography of Vergil"（Roma, 1973）が在るという。書誌的には、この書物は一九三三初版の復刻版である。この書物に当たれば、われわれの限られた範囲の知見を越えて、この「トリゴノス」現象はもっと広範囲に拡大しよう。

（3） H・グラーザー『ヒトラーとナチス』関楠生訳、教養文庫、社会思想社、一九八五（原書一九六一）、頁一五二～五四。

（4） ナチス期の文学については、差当って、上記H・グラーザーの他、池田浩士『ファシズムと文学　ヒトラーを支えた作家たち』白水社、一九七八。ヤン・ベルク『ドイツ文学の社会史　上』山本尤他訳、法政大学出版局、一九八九（原書一九八一）など参照。

（5） フランツ・ショーナウアー『第三帝国のドイツ文学』小川悟他訳、福村出版、一九七二（原書一九六一）、五頁。ヤン・ベルク、前掲書、ツィンマーマンからの引用は六六六頁。

（6） クリンクナーの論文は、①は"Studien zur griechischen und römischen Literatur", Zürich und Stuttgart, 1964, SS.225～246.②、③、④共に"Römische Geisteswelt"所収。引用は順にSS.274～292., SS.239～273., SS.293～311.

（7） R. Klibansky and H.J. Paton, eds., "Philosophy and History, Essays presented to Ernst Cassirer", Oxford, Clarendon Press, 1936, PP.223～254. この論文は書きなおされて、『視覚芸術の意味』に再録されている。なお、パノフスキー自身の自伝的エッセイである、「合衆国における美術史三十年―移住した一ヨーロッパ人の印象」、『視覚芸術の意味』中森義宗他訳、岩崎美術社、一九九一、原書一九五五、所収も参照。

（8） ルイス・コーザー『亡命知識人とアメリカ―その影響とその経験』荒川幾男訳、岩波書店、一九八八（原書一九八四）、二八七頁。

（9） ブルーノ・スネル『精神の発見』新井靖一訳、創文社、一九七九。